水行

廿五

25

△螢 十七 廿五 花鳥云以詞并歌為巻名源氏卅六歳ノ五月之事見タリ
又竪ノ并ト云

コヱハセテミヲノミコカスホタルコソイフヨリニサル思ヒナルラメ
此哥ヨリ名アリ

歌八首

[illegible]

源太政大臣之古尼改テ内府ニユヅリ給ヒシヤウトキニ又天下ヲ掌ニスル故ニヤ

札ヤ五人〻トハ空花明末如此人〻思和ニ定陌了可成

ツゞミテノ大夫ノ監カフトハ源ハナズラフベキニハアラ子ドウキ也

△今はかくおもゝしき程によろづのどやかに
おぼししづめたる御有様なれば、たのみきこえ
させ給へる人〻さま〴〵につけて、みな思ふさまにさだ
まりたゞよはしからで、あらまほしくてすぐし給
ふ。対の姫君こそいとほしく、思ひのほかなる思ひ
そひて、いかにせんとおぼしみだるめれ。かのけん
がうかりしさまには、なずらふべきけはひならねど、
かゝるすぢに、かけても人の思ひよりきこえん
ことなど、心ひとつにおぼしつゝ、さまことにう
とましと思ひきこえ給ふ。何ごとをもおぼし
しりにたる御よはひなれば、とざまかうざまにおぼしあつめ

讀杜艸堂

はゝ母君のおほきになりかきはくちおしさもまさる
ともにしかなしくおもひゆかれどもうち
いそぎあはてゝいつしかとおもひきど人めをつゝ
みたまはぬほどこの御事をもえ申しはじめ
くもおぼさぬまゝによそげくわたりたまへるを御前の
人ともにのどかなるおりはまゐりかよひ気色ばみ
まし給ふ（玉ん其度毎ノん）によもまたつぶれつゝけしきやうにもしたた
なくきこえさせはあいたづらにみえぬさまなれ
まそかし給ふ人（玉ノ心ノイ）はゝのわらは（和ノウチノん）なりけぢかく
りのし給へかいとくまゐりあそびつゝ給へどな殿
おほしくわいきやうはおはしけりひろこえさせ

信明集 神代ヨリイムトニ云ナル五月雨ヲコナタニナシテヤアフヨシモ哉
五月雨ハイム月ナルト古来云ヘリ五月ヨリ前ニアヒ度ト兵ア云アリキ給トし

兵部卿の宮などいまめかしきあはれさくえ給ひ
らうたげ（玉ヘ云宮ノ作切サ）にはつかしくなりぬる五月雨になりぬる
うれへをとふ給ふも（是ヨリ玉ヘ文云）まし けぢかき御様をぶるまひ給ふ
けず思ふ事をもなくてはつれてうれときこえ
給へは殿は（兵部ノ好色ハ面白カラント也）らんしてなまめいたる（兵）君達すき給
いんはをかしわかなんしもそゝろなまゝて給
うとまれて今の時に思ひ給へとて けなへわ
御けへてうしせわ給へといと（玉ん）うして心給へは
めんぶわんちはしとそまして給ひはゝ人ことゝ御心む
おとうくすきおもなどもおさく（玉ノ召使ニ三位女房ダチモナシト也）なしくめて母
君の御おもむけの宰相の君のけしきの人おほぬ

玉ノ母タ良ノ父ハ三位名ハ人トアンタリ其弟タノシナクハ三位ノ弟ナレバ宰相ニナル其娘宰相君トスリトし

ふてんきをなどくちおしからぬ世ありおもしろへ
殘りさへ陰だに露とわれへ限だに峯あれ兵とそてまれど
もまらしくきさおかりしもおもしろなびたる人なまめば
さるべきおもわくみれば母わなどこのく世中へば（源）めし
出てあそび薫などの露てまし世露に物（玉ト蛍ト物語ヲ源ノ字表兵卿ニ也）などにたまのふ
玉鬘をゆかしう思ひながすみかはりてさうざうしさにかく（源好色）
うるてある物あげらしされはいこれ（兵卿）宮などは兵
げまききこえ露時いほうし見いまだ露に時もわかれ
（兵ハ玉ノ好色ニテノハナシテ也）
なまめと祈りにはあるばかくんうき（源ノ）氣さみぬ
わざもかなとさひすまされ玉鬘つきておぼし
（甘代花巴兵ニ不可ヘ私云源ノイザウ立テ宮ヲ防タメニラテ宮ハ玉ノ心ヲ知ルト思ヒ居テ余程ト也）
かれ宮はわいなく室のまこと露けさうして宮を給

中宮も露えわ露きそでまましき物おもへわれあそばを
めぼらしかわてあとえのび色のめてありしまし
されば（蛍ノ君）など乃ますふ情しとも気まうきて見來すりけれを
備まてもの遊び露なれ（源ノ玉ヲ後見ノテイ）あといふ行くん（玉ト八）して宮の遊物ん
みくなる程によかりしてほくろひおほは玉鬘はまおや
かはあめでもほのかし思ひ侍りし人みさひずよ
我が小見の紛ふ篆乃恵などもん兵侍いらへ哭えん
こともお泊ばそぼりしくて例たるをも（源ノ）あれたね
とえ表ぼえ露へばあとわかりし夕やみ迄ておかず（墨ニテイ）
侍りなきさ宮乃氣色のくもりしきま夢あめかなる
宮の侍けいひといひえんなかうちよわ山北めく邊（源ノ見風ヘ）

宰相宮ノ所ヘヤルトテ玉ノ几丁ノ内ヘヘタルニ付テ源ヘテノタマフ詞也

風もいとゞしき御にほひのたちそひたれば いとふかく
かほりみちて かねておぼしゝよりもをかしき御
けはひを心とゞめ給ひけり うち出て思ふ心のほどを
のたまひつゞくることの葉 おとなおとなしく ひたぶるに
すきずきしくはあらで いとけはひことなり
おとゞいとをかしとほのきゝておはす 姫君は東おもて
にひきいりておほとのごもりにけるを 宰相の君の
御せうそこつたへにゐざりいりたるにつけて
いとあまりあつかはしき御もてなしなり よろづの
ことさまにしたがひてこそめやすけれ ひたぶるに
わかび給ふべきさまにもあらず この宮たちを

さへさしはなちたる人づてにきこえ給ふまじき
ことなりかし 御こゑこそをしみ給ふとも すこしけぢかく
だにこそなどいさめきこえ給へど いとわりなくて
ことづけてもはひいり給ひぬべき御心ばへなれば
とざまかうざまにわびしければ すべり出て
もやのきはなる御几帳のもとにかたはらふし給へる
なにくれとことながき御いらへきこえ給ふこともなく おぼし
やすらふによりたまひて 御几帳のかたびらを
ひとへうちかけ給ふにあはせて さとひかるもの
しそくをさし出たるかとあきれたり
ほたるをうすきかたに この夕つかた
いとおほくつゝみをきて ひかりをつゝみかくし給へり

几帳ノカタビラ　花鳥ノ今案云△ウツホヤ源氏蛍ヲ几帳ノウス物ニ入テ袖ニツヽミテ指出シ給フハ内侍ノカミノ姿ヲミセンハントテノハカリコトヽ見ユタトヘハ車イニ初蛍ヲアツメテ
文ヲ照ナシ面ハヘ二円シカルヘシ又此物語ニ源氏ハ蛍ヲタタンツリ、ミニカクシ給モ玉カヅラノ君ヲ兵部卿宮ニ見セナリテ弥心ヲニドハシタヽメンハントシ玉ヘリ此蛍ヲウスキ方ニツヽミカクシタ
ルナリカタビラハ三重ナルヤ縑又紗中ニ倍有ウスキカタトハウラノ方ヲ云トミルセタリルナリ几丁ノカタビラ夏ハ表裏トモニウスモノ也但几丁ノカタビラ外ノ方ヨリ蛍ヲツヽミ
モノヽ表ハアヤ裏ハ縑又紗中ニ倍有ウスキカタトハウラノ方ヲ云ハ源ノナヲシノ袖ノウスキ方ト云ん力能ハウツホ物語ト其心同シクシテ下ノ句ニホドモサクニギラハシテヤクミユレバ
ヲヤシテハメヤスカルヘキニアラズウスキ方トス
光ト云也源氏ノ袖ニ
ツヽミタメヘルヲ引カクシ
シタメヘルトハ思テ侍ラニイタクチガヒ侍ラニヤイカヾト△アハセテサトヒカルトハ几丁ノカタビラヲ打上給ヘルト一度ニホタルヲバハナチタメヘルナリサラヌテイニテ
俄ニハナチタメヘル故ケヂカキニトハアラハニ光ミユレバ玉ノアサミシキト扇ヲサシカクシ給ヘルナリ源ノムスメナルホドニトオボスミテヤヤウニノメヘルナ
ラン玉ノ心バセカタチ近
カヤウニクシタメヘルヲ
兵部卿宮ヘ見セ奉リテノ心ヲニドハサンノ源ノ用意ナリ　△花鳥ノ説ニテノタシカニシルヽナリ

（朱）附タクニテモ可得

夕ほかさいとおほくつゝみをきて ひかりをつゝみかくし給へりけるを

見えかくし給へるをさりげなくとかくひき
つくろふやうにてにはかにかくけちえんにひかり
たるにあさましくてあふぎをさしかくし給
へるかたはらめいとをかしげなりおどろかしき
ひかり見えば宮ものぞき給ひなんわがむすめとおぼ
すばかりのおぼえにかくまでのたまふなめり人
ざまかたちなどいとかくしもぐしたらんとは
えおしはかり給はじいとよくすき給ひぬべき心まどは
さんとかまへありき給ふなりけりまことのわが姫君
をばかくしもてさはぎ給はじうたてある御
心なりけりことかたよりやをらすべり出てわたり
給ぬ宮は人のおはするほどさばかりとおしはかり
給ふがすこしけぢかきけはひするに御心ときめき
せられ給ひてえならぬうすもののかたびらのひまよ
りみいれ給へるにひとまばかりへだてたるみわた
しにかくおぼえなきひかりのうちほのめくを
をかしと見給ふほどもなくまぎらはしてかくしつ
されどほのかなるひかりえんなる事のつまにも
しつべくみゆほのかなれどそびやかにふし給へ
りつるやうたいのをかしかりつるをあかずおぼして
げにあんのごと御心にしみにけり
なくこゑもきこえぬ虫の思ひだに人のけつには

虫ノナクコヱモセヌ思ダニキユカタキニ人ノ思ハキユニシキト也

（ルイノカタビラハ夏ハウスモノ也　栄花物語云ニヤウブノ三重カサネヲ花ニ菖蒲色ナリ）

ミノ思ハ声ニ出タルト心ニシテ歎トノ心ナリ

きゆる物は思ひに絶ぬやとやかて絶ふかやうにて
はかなしをおもひまはさんも猶ゆかしきたまへば
ばかりなるぞ

こゝにいきて身残りのこころもとなしといふかは
さる思ひなるらめなどはかなく思ふことなくて心ゆ
ばかりハひさしく絶えりけるはいとゞ後の世にまで
なし所ふかれりしさかいとしく胸焦がえたまふ
は実くしきやう見れば世たまひもおのづから
所の宿もとらしさうぬまじく夜ふかく出給ひぬ
明るなどふちな実なんなうにて行き逢ば候
こうきこえもとゞめ給ひ涙などおなまめかし

古今 五月雨ニ物思オレバ郭公夜深ク鳴キテイヅチ行ラン
右色抄ニ花云

さはいとよくおとゞ此君にはわ給へるとも人も
めでさへ給はずいとめおやざちてはくろひ給
ひし心ちひをうちくいもらで衰りうけ
おしとやかいふ君いおくさはがなは心ちをも
わの身ばかりのうらがしなどかくさまわ
世にし人めきさなさまゆてやうなは心ぞなう
まかのはをどいとすけなくもあらまし人ぬ
有様こそうつ身は世がわりやなんとおきかし
おかしなやむさなはいまとしうゆゝしきなさ
まはもてなしそしとおとゞいおかしなわかさな
はんぐせなまば中宮なども心とうなむしくや

五月五日ニ六条院中ノ馬場殿ヘ出御ノル場ノ庭ハウシトラノ町ノ花ナルノ近ク

思ひきこえ給へることにふれつゝたゞならずきこえ
うごかしなどし給へどやむごとなきかたのをよび
なさにわづらはしくておりたちあらはしきこえ
給はぬをこの君は人の御さまもけぢかく今めき
たるにおのづから思ひしのびがたきにおり〳〵人見
たてまつりつけばうたがひおひぬべき御もてなしなど
うちまじるわざなれどありがたくおぼしかへしつゝ
さすがなる御中なりけり五日にはむまばのおほいとのに
出給へるついでにわたり給へりいかにぞや宮は
夜やふかし給ひしいたくもならしきこえじ
わづらはしきけそひ給へる人ぞや人の心やぶり

夏ハヒトヘ衣ニ一重ニ直衣ニイヅクニクハハリタル色ワロニテカレノ源ノ氏ガ折トナリ

物のあやまちすまじき人はかたくこそありけれ
などいけみころしみいましめおはする御さまつき
せずわかくきよげに見え給つやも色もこぼるばかり
なる御ぞになをしはかなくかさなれるあはひも
いづこにくはゝれるきよらにかあらんこの世の人の
染出したるとも見えずつねの色もかへぬあやめも
けふはめづらかにおかしうおぼゆるかほりなども
思ふことなくはおかしかりぬべき御有様かなと
姫君はおぼす宮より御文ありしろきうすやう
にて御手はいとよしありてかきなし給へり見る程
こそおかしかりけれまねびいづればことなるす

アヤメハ〆レモ引モノヽ九ヒコサヘ（ヤトヽ云）ミカクレハ水カクレヽ我思ハトリハヤス人モナキトヽナカレニ流ヲモタセタリ 花云 後古今 貫之 アカクレテオヽル五月ノアヤメ草ナガキタメシニ人ハヒカナン 今案 長キネニムスビツケタルハチヲチノイニナゾラヘテタヘ又個ノホドヲシルセタルヽトヽ 長キ根ノタメシトスルカ根合トムモ長サヲ合スル事ぞ

兵部卿ノ宮ニテノ御菖蒲ニアラハレタルトハ浅キ心トヽ郭公ナノヤ五月ノアヤメ草アヤメモシラヌ恋モスルかなノ心ニ似アヤメモシラヌハ無分別ノ心ニ鳴ワタルヲカケテヨムヽミヲ下タルヲ

なしや、

けふさへやひく人もなきみかくれにおふる

あやめのねのみなかれんとある、れいにもひき出つへき

ねにむすひつけ給へれは、けふの御かへりなとそゝのかし

おきて出給ひぬ、これかれもなほときこゆれは御

心にもいかゝおほしけん、

あらはれていとゝあさくもみゆるかなあやめも

わかすなかれけるねの、わかゝしくとはかり

ほのかにそあめる、手をいますこしゆゑつけ

たらはと、宮はこのましき御心にいさゝかあかぬ事と

見給ひけんかし、くす玉なとえならぬさまにて所々

ツノミシテ手ヒキノシラウヲ取ヤ（サシ）ニ心ユルビタル[?]トモアランニ源氏色[?]ノ人ノキズツクヌル人[?]スガ[?]恩[?]ニト玉ノ[?]双地[?]

タキリノ[?]花ナルヘ司[?]タキリハ左近中将ノ[?]手番日ニ五日ハ荒手番五月五日左近騎射六日ハ真手番[?]番ハ五月四日ニ[?]日荒手番[?]ツガヒテイル年中行事ニ左右ノ近衛馬ニ乗テ弓ヲイル[?]今日禁中ニテアリシツイデニタキリ[?]人[?]テ[?][?]ヤトノ[?]ル[?]日[?]ハニツルト[?]

乙女巻ニ馬場殿ハ東ノ方トアリ花近[?]ハ馬ノ[?]計カ但今日キシヤモアリツラン[?]

よりおほかり、おほししつむとしころのなこりなき

御ありさまにて心ゆるひ給ふこともおほかるにおなしくは

人のきすつくはかりのことなくてもやみにし

かなと、いかゝおほさゝらん、殿はひんかしの御方にも

さしのそき給ひて、中将のけふのつかさのてつかひ

のついてにをのこともひきつれて物すへきさまにい

ひしを、さる心し給へ、またあかきほとにきなん

物そ、あやしくこゝにはわさとならすしのふる

ことをも、このみこたちのきゝつけてとふらひもの

し給へは、をのつからこと〳〵しくなんあるを、ようゐ

し給へなときこえ給ふ、むまはのおとゝはこなたの廊

タキリノ宿人ヽ ね監 ね曹 府生ヲ云ニヤ

上ヲバ白クスソヲ紺ニ下ヽ紫ニテモスルニヤ今世モ車ノ下簾如此ナリ

菖蒲ヲヒカユメ面ハ青ク裏紅梅ヽ

樗ハ面ウス色ウラ青ヽスソゴハスソ紫ヽ樗ヽハ面紅梅ウラ青ヽ是ハ十テシコノ花ヲカタドルヽ何花ニハ薄萌黄ヽ色トアリサモアラン

よわんとをまさりなどをのしけるのきんへわるとどのの
たはきてりのえよやたのはけりさまはゆへよしあるは
宿人おほかるかくの殿上人に成とふ
まじとの彩香だ物きんこと成ほしともおも
へあをき菖蒲のはながよわもわりくなど物みにわかる
まそ羅うのたぐちにみきとあ残やにうけわうして
ゆきのめきさとなりすそこれ濃淡なたてわうしわうれ
しもぼうんなどさまよふにふざうぶがさ孫のあこめ
かこあかう匠物のかざみきてふわりへぞ玉の
菖乃なめ成こ礼まうしくなまるするかぎわ四人しも
樗の扇はわふちのはすこれもふでしきのお装の色

両義有 花ヲ云 司ノ手結ニハ宿人以下馬ニ乗テ的ヲイルヽ公事ニサリヽカハルトハラスヤケリハ人ヽカヅムリ為服サヽ不宗モアリ 此時ハコトヽ花宗集ヲ云ヽ又手結ニハ宿人ヲカリイルヲ今日ハ上菖近ク宗ラモ可云

したるかうきぬをふのようひがなるわきあこそれは
こ義ひとへかさねかなきしこかさねかさねなど
おかがかの中そでおのくいどえふかなるまそなし
えみあおわうの殿上人などはめ残えそはく
くしまりむひはしの時なるわかるかる物それかくれり
出羅てげよみさちおりしばどひたわてはうひの
おんやきむとふはさ後のはかまで色めしちの義のつまを
奈わてはまことよ今めうしくあうひくしし羅
女はなよのあやめもうしぬむとなまがら老人ども
さへえんおほさうずくとはくして男をあげたるて
まどりしさなどをえるがおしうわ園の町も

勝負ノ後乱声アリ
也賀茂競馬ノ後勝
ノ方ニハ太コヲ打テ乱声
ヲ上ルト也

とをしてはるばるとあれバあなたにもかやうの
わかき人共ハみけり打毬楽らくそんなどあそびて
かちまけのらんじやうどもののしるもよるにいりはてゝ
なにごとも見えずなりはてぬとねりどもの禄しなじな給はる
いたくふけて人々みなあかれ給ひぬおとゞは
こなたにおほとのごもりぬ物語など聞こえ給ひて
兵部卿のみやの人よりはこよなくものし給ふ
かなかたちなどハすぐれねど用意けしきなどよしあり
あいきやうづきたる君也忍びて見給ひつやよしと
いへどなをこそあれとの給ふ御おとゝにこそ
ものし給へどねびまさりてぞ見え給ひける年

（打毬楽 是モ楽ノ名也 ナツソリ河内ニ有也 是モ六日ノケイハノ後ソウスト云タリ 楽ノ名也）
（カラ人ノシヤウゾクニテ馬ニ乗テキウヲハシラシムヲタギウト云也 ギウヲトハ テニモリヲモハズヿ也 五月六日武徳殿ニテ有ル也）
（形能人アリト云ドモ兵ハスグレタリト也）
（けしき 詞抄ニ面白能ト云ゝ）

兵ハ源ノ弟ナレドモ
フケタルトハ源ヲ美
故ワカキト云ヿ也

ごろかくをりすぐさずわたりむつびきこえたまふときゝ
侍れどむかしのうちわたりにてほのみたてまつりしは
おぼつかなしかしいとよくこそかたちなどもねび
まさり給ひにけれそちのみこよくものし給ふ
めれどけはひおとりておほきみけしきにぞものし給ひける
とのたまへばふと見しり給ひにけりとおぼせど
ほゝゑみてなほあるをよしともあしともかけ
たまはず人のうへをなんつけおとしめざまの
こといふ人をばいとおしき物にし給へば右大将
などをだに心にくき人にすめるをなにばかりかは
あるちかきよすがにてみんハあかぬことにや

（大内）
（兵部卿ノ弟也帥テ云也）
（オトリタルド 王孫メキタルト也）
（源氏）
（ヒゲ黒）
（玉ニアハセテノ心ニ云ハ）
（不足也）

後拾遺七　香ヲトメテ
カル人アルヲヤ菖蒲ヤ
シノコニノスサメザリケル
拾遺七　生ヒ茂ル沼モスサ
メヌアヤメ草カリニモ
人ノコヌガワビシキ
神楽ノ詠ニ其沼ヤ
秋ニ草カフ草ハトリ
カハン水ハトリカワン
花今案云菖蒲ハ
沼ニ不食草ナレバスサメヌト云リ
ミギハノアヤメトハコナタニ水ノホトリニシヤウブヲウヘタルヨシ乙女巻ニ見タリ　花ナルノ我カクノ如ニナスラヘテヨミタマヘリ
ヨノツネハスサメラレヌカナレド今日ハケイ馬ニ牛ニナノ光アルトナルト云

あらんと見給へどことにあらはしてものたまはず
いまハたゞおほかたの御むつびにておましなども（花宗中）
ことゝゝにて大とのごもるなどてかくはなれ（各別ニシテ）
そめしぞと殿ハくるしがり給ふおほかたなにやかや
ともそばみきこえ給はで年ごろかくおりふしにつけ（源ヲウラミヌ也）
たる御あそびどもをも人づてに見きゝ給ひけるに
けふめづらしかりつることばかりをぞこの町の（花ナルノ面目）
おぼえきら／＼しとおぼしたる

花散
そのこまもすさめぬ草と名にたてるみぎはの
あやめけふやひきつるとおほどかにきこえ給ふ
なにばかりの事にもあらねどあはれとおぼしたり

鳰ハカゲヲサヽニシル多之
ワガコニトハワカゴモナリ
花ヲシヤウニヒシ我カヲ
コモニヒシテノワカルマジ
キトナリ

源
にほどりにかげをならぶるわかごまはいつか
あやめにひきわかるべきあいだちなき御事ども
なりや朝夕のへだてあるやうなれどかくて見
たてまつるは心やすくこそあれたはぶれ事なれど
のどやかにおはする人ざまなればしづまりてきこえ
なし給ふゆかをばゆづりきこえて御几帳ひきへだてゝ
大とのごもるけぢかくなどあらんすぢをば
いとにげなかるべきすぢにおもひはなれはてきこえ
給へればあながちにもきこえ給はず長雨例の
年よりもいたくしてはるゝかたなくつれづれなれば
御方々ゑ物語などのすさびにてあかしくらし（六条院中ノ）

くらし給ふあかしの御かたはさやうの事をも
よしありてしなし給ひて姫君の御かたにたてまつり給ふ
西の対にはましてめづらしくおぼえ給ふ事のすぢ
なれば明暮書よみいとなみおはす つきなからぬ
わか人あまたありさま〴〵にめづらかなる
人の上などをまことにやいつはりにやいひあつめたる
中にもわが有様のやうなるはなかりけりと見給ふ
住吉の姫君のさしあたりけむおりはさる物
にて今の世のおぼえもなほ心ことなめるに
かぞへのかみがほと〳〵しかりけんなどぞかの
げんがゆゝしさをおぼしなずらへ給ふ殿もこな

玉ノ昔物語草紙ヲ入候テ

住吉物語云中納言ノ北ノ人ノ娘三人有中ニ一人ハ宮腹也ミメカタチモスグレタリ…ニ母我ハラノ娘ニ父志ニサリシメルトヲ子メニテ六条堂ノ別当ナリヒメ君ノモトヘ忍テカヨヒシヲ…ト云テ父中納言ニ…具後内大臣ノ子宰相右衛門督タル人ニアハセントスレバ…ニ母又カゾヘノカミトテ七十計ノ翁ノ目タゞレシヲ白ニ…ゾノ為ニヌスマセントタバカル主計ハヨロコビテ日ヲ定ムルヲ姫君聞テ父ノ方ヲ忍テニゲ上住吉ニカクレ住テ後宰相右衛門ト相逢ト係サカヘ給ヘリ

主計ガヌスマントセシナリ

後ニ宰相トス三位トキソナリ

ヨドロ〳〵説ナリ

宮作リヒダノタクミノテフノ音ホド〳〵シカルメシモミシカナ

かなたにかゝる物どものちりつゝ御めにはなれ
ねばあなむつかし女こそ物うるさがりせず人にあざ
むかれんとむまれたるものなれこゝらの中にまことは
いとすくなからんをかつしる〳〵かゝる
すゞろごとに心をうつしはかられ給ひてあつかは
しきさみだれのかみのみだるゝもしらでかき給ふ
よとてわらひ給ふものから又かゝる世のふる事
ならではげになにをかまぎるゝことなきつれ〴〵を
なぐさめましさても此いつはりどもの中にげにさも
あらんとあはれを見せつき〴〵しくつゞけたる
はたはかなしごとゝしりながらいたづらに心

新ニオチカヘリナケウナヒ子カ打タレ髪ノ五月雨ノ比

玉髪ノ乱ノ事也

市ヲタレガミトモ云テ折ニ人ヲサミタレ髪トアリ

モノカラトヲサヘテ古キ物語エナドハ偽ゾト思ナガラ女ハ夫ニ心ヲウツスモノト思中カラ又カ様ニ昔物語ナラデハツレ〳〵ヲナグサメタキトハ偽ヲ手メル中ニモ又サモアラニヤト次ギノ哀ヲミセテ手メルハ心ウゴクト

古今ノ序ニ王ニ手ル女ヲミテイメヅラニ心ヲ動ト云詞ニテ有リ

古エ物語ヲ見ルニ偽ト思テ見ルヽヽサアルベキ事ヲミレバ先ハ驚事モアレ氏静ニ又見ルニ見レバ浅ニナル事ヲ手タルトニクケレ氏初フト見タルトキハ興アリトゾ

うつくしげなるひめ君のもの思へるをみるに
かた心つくかし又いとあるまじき事かなと（一云方ニ心付）（河海ニ住吉物語ニモトアリサナクトモ昔物語ノコト）
みるみるおどろおどろしくとりなしけるがめおどろき
てしづかに又きくたびぞにくけれどふとをかしき
ふしあらはなるなどもあるべしこのごろをさなき
人の女房などに時々よまするをたちきけばもの（明石ノ姫）
よくいふものの世にはあるべきかなそらごとをよく（昔物語ノ作者ヲサシテ）
しなれたるくちつきよりぞいひ出すらんとおぼゆれど
さしもあらじやとのたまへばげにいつはり
なれたる人やさまざまにさもくみはべらんただ（玉ノ詞ニアタリテ）（源ヲサシテ）
いとまことの事とこそ思う給へられけれとて硯を（玉ノ心ニハトゾ）

神代ヨリアザケリ給フ詞也
日本紀舎人親王作始神代至持統御宇
昔物語ニ合テ日本紀ナドハカタソバナラント嘲ノ詞也
其人ノ上是ヨリ世上ノ理ヲ仰ス古物語ニモ人ノ上ヲ作ルニヨシキタルハナキトナリ
ヨキモアシキモ此一段ハ己ガ詞ヲ他人ノ借名言ス源氏一部ノ寓言述ス白天勿合名過實ニ此段ハ玉ノ物語ヲハ実ダモトノタマヘルニ付テ源ノ世上ノ理ヲノタマヘル昔メキ並ハ此物語ニテハナキトス偽物語ニテモナク又実物語ニテモナキト何レヲ置モ世ノ理ヲハナレテハナキトス

をしやり給へばこちなくも聞えおとしてけるかな（源ノ詞）（玉ノネ与トサテ先ムモ物語ヲ偽トアヅルトゾ）
神代よりよにある事をしるしおきけるななり日本紀
などはただかたそばぞかしこれらにこそみちみちしく
くはしき事はあらめとてわらひ給ふその人の
うへとてありのままにいひ出る事こそなけれ
よきもあしきも世にふる人のありさまの見るにもあか
ずきくにもあまる事をのちの世にもいひつたへさせ
まほしきふしぶしを心にこめがたくていひ
おきはじめたるなりよきさまにいふとてはよき事の
かぎりえり出て人にしたがはむとては又あしきさま
のめづらしき事をとりあつめたる

人ノ帝カラ國ノ他國ト又日本ニテモ古ト今トイキれハカハル民心ハ同トノ

ふるきためし世のかはれりなれども人の心ぞど
のざえはくまやすらかならしめやまとの國のす
なきと昔ヒ乃ありうふ法國しふう義ことあさき
あとのけぢめよりはじめひさ小法ふかうす必ず
いひえてんも事のんたがひてなんあわきる仏の
みとうはりしおんまてとも金き経へ法師法方便

方等經ハ五時教中ニ第三ニアタル大乗教ノ初門ノ三界唯一心ノ心ニヤ

といふ事ありてさらになき物ハ家りしこたがしふ
頓金道にへくなん方便經此中よおかまれ心いひ
まてゆけバひとつむまりあわて菩提必ず煩悩との
へざぬすわなんこれ人民よはきけし銭ばかりのうゝい
うハ里人るよくい徳ゑんくてなる事もなし

うらびなかぬや物語綺語いせわざとのすゞみ此経ひ（工物語ヲ実ニシテ）
なしはにておほからぬ事乃なけのかざり語よりやうに（原门）
ぎろうな法せまもの物語ハあわやひかりしけど（実法）（物語ノ内ノ）
をさき物の姫君も濁る語乃座うふ法まなくそうおぼ（玉ノ）
めきたるさふハ世ありあしおもひさたぐひ義物語（思案可图）
まして世ふつらへさきんとさしよりさくまへ妙へバ（玉ノ前ハ原）
おぼをとひまへでそうばともうくめばらのなむこと（玉）（玉门）（カソ今ヨリタニハズ在今モノテイニテモトヤシ）
は世語小さうい識物ね座のめ道心の経座ふめぼう（原门）
かすやおほく経ふげまうまるな義んちはまよとそ
まわぬ妙へる法まひとあさまうわ
思ひわまわ昔の記をはせぬ道心おもやりうも（ムカシ物語）（原実父ノ孫ニ）

なはなきたぐひなきふかきうなれば仏の道にもいりぬべ
しくさういひ達とれ給へかゝるかたもまさ給
いまはいとゞくらき座かつくいとしう姫給へば
給うじて
玉 山ぶきぬをたまぬまでと〳〵まぶりわらはせふ
うちのおやの心にしみさえ給ふもんぼしそれば
いとくるしくもえざる達給けれどかくしてありなさぶらふ
寝覚なるもんむらさきの上も姫君のはあつかひへふ
ことづきて物語は狭衣こそはじめよりさわがしまかりく
物語の主はそれを浅よくうき山ほとりなとて
寝覚ともいひは寝覚女君のなまご給もなくてひる給

（青表紙ニハ久しノトアリ共音相通カ 枕草子ニモコノトアリ）

一給へ御はを着の外わたまへおかし出て女君はみ
給ふかしゆわらはとちさまいらはまさるらんまゝ給
あらず姫たかしふま侍べくられどけさは人よいざわ
けまと浅くこ出給へかけまたぐひおかりきぬす
ともいこれもんあ津め給へるるらんうし姫君これをお
まことの世を達たる物語などあよえきのを給ふう
見るめんつきたる物の心はじめなどはおかしとまは
むかし給ども事すふいあわれもう見なまさ給
いんだゆかしき座との物ふとこはかしとご座の給
うこや給らぐん金き給はべくなんうへこゝ給わさけ
なやふひとまのどもいみるゐもりゝいさくらう

室通ニノアルヿヲキヽテ面白ト不思ヨ世ニモアルヿト思ハンハトし

ウツホノ藤原君　藤原氏ニハアラズ一世ノ源氏ノ娘也異名也ウツホ物語ニ云左大臣ノ吉トテ一世ノ源氏ニテノ右大将ニサヨリト云人アリ
少ヨリ二人物カタラヘリ一人ハ太政大臣ノ娘一人ハ時ノ帝ノ御ムスメノ后腹ノ女一ノ御子也其ハラノ九ニアタルアテキミト申容心スグレタレバ
春宮ヲハジメトキノエウソク皆心ヲツクスニコト人ニハ心ヲヨクシテ春宮ヘ参タニヘリケレバ源ノサネタトモ云人ハ出家シテ山ニコモリ其外
流羅家ニ火ヲカケテ
オチチリタル人ミアリトシテアヤニナハナクスグレシキヤウナレモアリツレナキト云ムニヤ
スクヨカニ――　サ左京君ノタメニ――シタニヘル歌ニハ　コケ生ル岩ニ千代フルアハヤレジバ
キナル泉ノ水ゾシルラン
又ミストイハバタメシニ――めけスグ――在一夜ニテヤハラカメ不十キトナリ
モセンモノヲノミ思フ命ハ君ガ――

うつほのふちはらのきみのむすめこそいとおもりか
にはかはかしき人にてあやまちなかめれとすく
よかにいひ出たるしわさも女しきところなかめるそ
ひとやうなめるとの給へはうつゝの人もさそあるへかめる
人ゝしくたてたるおもむきことにて
よきほとにかまへぬやよしなからぬおやの心とゝめて
めておほしたてたる人のこめかしきをいけるしるしに
てをくれたる事おほかるはなにわさを
してかしつきしそと親のしわさへ思ひやらるゝ
こそいとほしけれけにさいへとその人のけはひ
よとみえたるはかひありおもたゝしかし言葉の

源詞　今世ノ人ヲサス
流抄云　巴ニ大ヤウィム

コトハノ――花ニ
物語ノ作者トスハ
アヤニリシ地ノ人ノ――ヲ詞ノカギリホメタキタル人ノスルワザニモ云エス言葉ニモ
可然コトナキハカヘルヲトリセラルゝトシ地テ一筋ニ善悪ヲワキマヘズ人ノ事ヲ云ハア
シキトノ――し双地し

アトシヒメノメニ繋ハ
――ニ母ノア
――ハ物語ノ内ニモ
アル其ハエナドニアルモ
キセタ――ハヌトナリ

かきりまはゆくほめをきたるにしいてたるわさ
いひ出たる事の中にけにとみえきこゆる事
なきいとみおとりするわさ也すへてよからぬ人に
いかて人ほめさせしなとたゝこの君てんつかれうまし
くとよろつにおほしのたまふまゝはゝのはら
きたなき昔物語もおほかるを心みえに心つき
なしとおほせはいみしくえりつゝなむかきとゝ
のへさせ絵なとにもかゝせ給ける中将のきみを
こなたにはけとほくもてなさせ給へれと姫君の
御かたにはさしもはなちきこえ給はすなとそし給
わか世の程はとてもかくてもおなし事なれと

源詞　姫　人ニヒゝシ　源ノ　夕キリ　紫ヘハ　明石姫君　実ノ兄弟ナレバ

アカシノヒメノ南ノミス
ノ内ヘ夕キリノ入ヿヲ
ユルシ給トミヘ
ダイハンニ私犯柄家
ニモアリ女房侍ホ
ナリ

なからむよりはおりひ給ふるにいとあさき思ひそわぬふ（仲み）
こりどもこうとわやまてはおかゆべけまどそなかれ（仲三ちみ）
おもてのみまえうちは遊びし給へまでるめりりんしゃの
女房の中（カ）いゆるし給りしどもまいらおはせぬほどなかる（原乃子）
ひかそれいと給むおどとなくうしはるかゆかし給へまおかゝ（夕キリ）
うさの心もちのみどもいかと物ゝしくまめ給うよ
まのし給ふ毛のれしかう（原んに）給座くあがりしゆはまわ
（アカシノ姫九ツ）きかうさいかきけるなびぬのわさびなどれけりひのらき遊
まがなれ（タん）（一雲井）人のも給ともりあそびてすぐし志年
月のまほおりひ出るほどまば白ひなのとのゝ宮ば
うんいとよくし給ておかくりうちおかれ

給ひぬわさも絶ぬべきおかわよはえまなし事こそ
（ニモ女ナドニ夕キリノ好キタナ給ト）
のさまのひふみくいはまさしはまどもたのみうくべくも
志れさらばさ給りさよなどりはえざらむとんとまわ
（一向ニ女ノ我ヲ捨ル心ハニシテサヌヽ）
ぬべき義残も志のそな残ざわおとりしあしてな残
うれ光どもの袖をみえしふすしてさえがなと思ふこ給
（一雲ノ雁ト六位スクセト云シトキノ）
のみず給んおどふ義よしりえとまわ恐るほな
が給よなどうくはらひまとえざたまふ給ふうはは
（オルヘキ事）二井ヲ云ナバ父内フモユルシヤセンム
ゆるし給ひもしはべりめまどほらしと思ひし
あわくいふせ人もこゝとりきゆてきの清らんと
（但又父内フノ世ニミシラセテ己改嫁シユノヿヲ思召メルイコシニヤ
包云世上ヘモ又アナタヘノ理ヲ失テ自他ノ沢ヲ世ニシヒハシサセテカラトイソガヌナリトミヽ）
おりひなきしまとまがゝくそさうしみえそりか
ふはを給のあうぬ恋をはらしゆんきそぶるりしふは

柏ノ中将頭ノ中将トし

いつまで思へくらべさせうとの君達ふかゝるもあまゝゝし
などのたまふおなじうは尚侍のひめ君の御
有様とも右中将はいはゞふるくおもひしみにし
よふたよりもいとゞなげきまさの君などかうち
まねけれど人のうへにてはもどきわざなる
たわむれはまさなくいふへてすもえし給へる暮れ
ちゝおとゞうちの情なりひかりたわ国のおとゞ
いはずともそらくいとゝおかすにふえ和ひいで
給ふおぼし人ずらにさずひはゝ心にまうせ給
やうにほくいきかひまそえ給なしふそ給にかは
あまのふもおはせぬ世中をもかくおぼしき事の

とこはわ給ひ姫君もつくしきとたかふみさほめて物
え給ふべいとくちおしとおぼすすぢなでしこの君達給
ひ物よ竹物語出給ひしすみねはいはなみん
ものされわかくなれ心よひのまそ思ひけなれ
し人を行へまつりほ成またるすゝみて女子とい
ふ物なんいふかひなくめざましかりけりわかところさ
しらぬ我子といひてあやしきさまにてありふれ給
ふらんとてもつくてもやむごとなき中かりおか
わさふ君達は女はかしさまなる名聞にくさ人あるが
見てことゞめよ心の思さひありまりきそさ給はずさき
事ものおかずかし中に光はいはしと詠じなんへてみれ

きぬにも思はざりし人のことになむ物うちもだしてて
うくすくなりわたる物のくまぐまにひとわたり見えひた
菊をこれは口知りし事とそよの語ひ出けるなどは
さしもはるばる志語ひける人は根ことにはきて安
こうしぼる語へ添たるひだに我れもなほしるな
なり然るとんうしくかいなく覚ゆる旅の後の語ひて
いとよくあはれなる物めして合せ語きこゆる事は
清心にもまつれ語り然済子を人の物にもして申文
出ぶ事屋とせとうわたるにこれ人の子よ滅すい
おさくるしいりなるすめりあらんなど皆は付
おがしの語にべきめ添